上新屋遺跡通信　No.4

（財）浜松市文化振興財団
浜松市生涯学習課文化財担当

2008 年 8 月 26 日

◆ 調査が終了しました

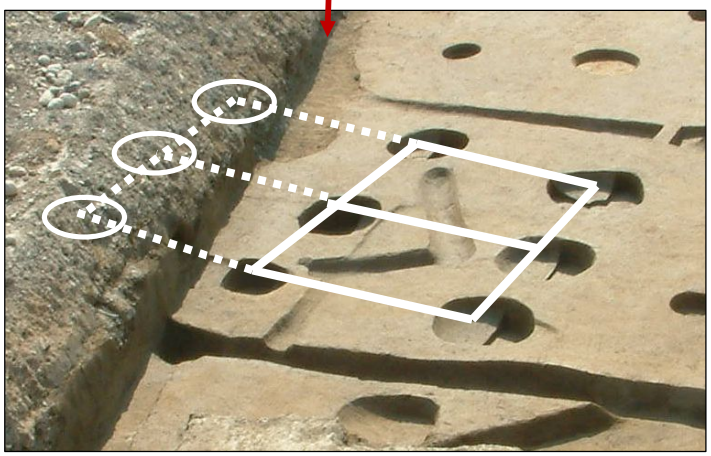
南側調査区中央部分を見渡す

６月２日から３か月の予定で開始した『上新屋遺跡』の発掘調査でしたが、地域の皆様の御理解と御協力を得て、８月末をもって無事終了することができました。

今回の調査では、調査区全域にわたって土器（主に 7～8 世紀の須恵器や 12～3 世紀の山茶碗等）が出土し、奈良時代から江戸時代まで幅広い時期の遺跡であることが分かりました。主な遺構は、川の跡、水田に伴うあぜや用水路、多くの溝や小穴、倉庫らしい建物跡一棟が確認されましたが、住居跡は見つからず、調査区は集落のはずれではないかと思われます。

また、鎌倉時代以降と思われる複数のふいごの羽口や多くの鉄滓（鉄のかす）が出土していることから、周辺に鍛冶の仕事をする人が住んでいたと推測されます。

◆ 南側調査区で建物跡が見つかりました



南側調査区中央部分で、規則的に並ぶ直径６～７０㎝、深さ２～30 ㎝の穴が６つ見つかりました。おそらく、調査区外側にもう１列３つの穴があり、これらの穴に柱を立てて、２間×２間の大きさの建物が建っていたと思われます。この建物は高床式で倉庫として使用されていたのではないかと推測されます。

◆ こんな遺物が出土しました

はそう（須恵器）：竹などの管を穴に挿して液体を注ぐ器

あぜの脇から出土した完全な形の山茶碗（12 世紀）

ふいごの羽口：ふいごから炉内に風を送る管（粘土は熱せられ、一部はガラス質になっている。）

◆ こんな遺構が見つかりました

集中して土器（須恵器の坏身、坏蓋、甕、長頸壷等）が出土した遺構

現代～奈良時代の川の跡

今後、遺跡は埋め戻されてしまいますが、地域の皆様の記憶の中に生き続け、伝えられていくことを期待しています。

私たちは、本調査の成果を調査事務所に持ち帰り、土器の接合・復元を始めとする整理作業や報告書の作成に取りかかると共に、次の発掘現場での調査活動に取り組んでいきます。

今回の調査を通じて、近隣にお住まいの皆様には、いろいろとご迷惑をお掛けしたことと思いますが、大変好意的に私どもの調査活動を見守っていただき、本当にありがとうございました。改めてお礼申し上げます。

なお、現地調査事務所は、８月 26 日をもって閉鎖いたしました。

編集：上新屋遺跡発掘調査事務所